

の慰めであった。

「イスラム」教の土着民は髪も目も黒く、我々と変わらぬ相貌で人情豊かな人々である。私たち若い一班は共産党「オルグ」から反動分子と睨まれ、懲罰として農村へ送られる。収穫期の砂糖大根の貨車積みで、一人で六十トン無蓋車満杯が「ノルマ」。貨車が入れば昼夜の別なく積み込みで、入らないときは丸々休み。「バザール」へ行って物々交換したり、女性の宿舎で遊んだりで一冬を過ごす。

二十二年春、世話になった彼女たちに別れを告げて原隊復帰。再び地獄の「ラポート」は、戦後、アングレン川に発見された石炭層の露天掘り開発のための河川改修工事であった。途中マリアにやられ、悪寒と高熱（四一度）でふらふら。人間、栄養不良が長く続くと「思考力・記憶力」が消滅して、牛馬に近づくことを実感した。

二十三年六月、思いもかけぬ帰国命令で「ダモイ」。天にも上る心地で「ラーゲル」に永遠の別れを告げて「ナホトカ」へ。乗船待ちのとき福井大地震の「ニュー

ス」があり、北陸は全滅と聞いて「ショック」を受けたが、生きて帰れる嬉しさは何ものにも勝る。

夢に見た故国、涙で見た緑の舞鶴の土を踏んだのは、昭和二十三年七月二十四日であった。

（彼の国に眠る英霊に合掌）

シベリアの抑留体験

島根県 高尾敏教

私は大正十三年一月二日生まれです。

昭和十九年四月、満州国新京で徴兵検査を受ける。九月二十日鞍山市の満州第一二四部隊へ入隊した。

鞍山には、昭和製鋼所があり、これを敵の空襲から守るための監視と照空を任務とする、別名関東軍野戦照空第一大隊といった。一緒に入隊した五十名は全員満州在住者で、甲種合格者はわずかで、第一乙種合格者が多かった。

部隊の配置は昭和製鋼所を囲むように、中隊本部と

五分隊で構成されていた。部隊は仮設の陣地で長方形の穴を掘り、その上に三角屋根をした薄暗い兵舎であった。ここで五カ月間の初年兵教育を受ける。別棟には中隊長外、内務班、教育係の見習士官が入っていた。このなかの一人、菅見習士官は、初年兵教育係とし、またソ連抑留中は通訳としてソ連側との交渉に当たられ、復員後、収容所での通訳の一件で国会に証人喚問され、問題の解決を見ずこの世を去られたが、今でも忘れることのできない人である。

五カ月間の教育も終わり、昭和二十年二月一期の検閲を受ける。幹部候補、下士候補や南方転出と、ほとんどの者が隊を離れていった。通信班に残ったのは、私と高知県出身の下元長人君の二人だった。三月には次の初年兵が入隊してくる。約五十名で、そのなかには朝鮮籍の兵隊も数人いた。検閲も終わり多少は余裕もできてきた四月、入隊以来初めて戦闘配置につく。この日、B 29の空襲を受ける。通信班は聴測班が測定した敵機の位置を砲隊へ通報するのが、私たちの通信班の任務であった。この日は七機のB 29が高度一万メー

トルで飛来し、製鋼所や陣地のすぐ近くへ数発の爆弾を投下して悠々と立ち去った。

このころ、既に日本の戦況は不利であることは、よく耳にすることであった。八月になり、ソ連が参戦したことを古年兵から知らされる。そのうち陣地の撤収命令があり、通信班は全機材をトラックに載せて出発する。移動先は奉天であった。長沼公園の近くに陣地を造り、通信機材の整備点検を終えて、ここで部隊全員、ソ連軍の侵入に備え、肉薄攻撃を想定し待機中に戦争の終結を知る。

通信班長から終戦の詔書が放送されたことを知らされた。非常呼集がかかり、部隊長から正式に戦争の終結と今後の行動について説明を受け、人事係より兵のみ進級辞令が交付され、現地除隊を希望する者は申し出るよう伝達があった。ここで数人の除隊希望者と朝鮮籍の初年兵全員が隊を離れていった。上部からの命令で武器の集積が始まる。このころは、まだソ連軍の進駐はなかった。奉天市郊外の北陵へ集結することになるが、当時は治安もよくなかったので、分隊に一挺

の小銃の割当てがあった。北陵で約一カ月くらい、内地へ帰還できることを確信し幕舎生活を続ける。

九月十五日、六日ころだったと思う。奉天駅の隣、皇姑屯駅へ集結することになり、夜を徹して歩いた。ここではじめて、ソ連軍の兵隊を見る。将校、下士官は制服を着ていたが、兵隊は有り合わせの民間人の服を着て、両腕には時計をいっぱいつけて、やたらにマンドリン銃を撃っているのには驚かされた。

やがて、ソ連軍の将校の人員の掌握が終わり、内地へ帰れることを確信して、貨物列車に乗り込んだが、この日からシベリア抑留の長い旅立ちが始まる。

途中、新京駅で停車した。この駅構内には満鉄勤務当時の職場もあり、また一年前には多くの職場の人に見送られ入隊した懐かしい駅でもあった。たまたま車外を見ると職場の同僚が一人いた。ここで下車し職場へ復帰するよう勧められたが、ソ連兵の監視もきびしく、ついにその機会を逃してしまった。列車は走っている時間よりも停車している時間のほうが長かったように思う。

黒河の駅に着いた。ここで下車。貨車で持ってきた物資を船に積み替える作業をさせられた。四、五日はかかったと思う。ここまで大切に隠し持ってきた腕時計を作業中にソ連の監視兵に没収された。対岸のブラゴエシチェンスクに船で渡り、また貨物列車に乗せられる。まだこのころは内地へ帰れるものと信じていた者が多く、狭い車内で進行方向を東だ、西だと言っていたが、列車がバイカル湖まで来るとだれもが諦めて「日本ヘダモイ」を口にする者はいなくなった。

最終目的地に着いたのは、月も変わり十一月になっていた。カザフ共和国カラガンダ地区第九十九捕虜收容所第十一分所、ここが私たちの落ち着き先であった。奉天北陵で編成された部隊は鞍山の高射砲第八六〇部隊と照空隊第一二二四部隊と合わせて一千名で、第八六〇部隊の松本少佐を長とし、第一二二四部隊の富沢大尉を副とし、軍医一名外に見習士官ら旧軍隊の延長であった。收容所は以前ドイツ人捕虜が收容されていたところで、入所したとき、まだ数人のドイツ人捕虜とルーマニア人がいた。建物は煉瓦造りで外壁には白

粘土を水で溶かして塗ってあった。雨が降ると、塗料が流れ、たびたび塗り替えさせられた。部屋の割当ては一室に五〇人くらいで、寝台は四人用で、木造の実に粗末なもので、板と板の間には南京虫がいっぱいた。入所早々よく作業に引き出された。

十二月になり、寒さも本格的となったころ、昼夜の別なく貨車から材木下ろしをやらされた。雪が降ると、鉄道線路の除雪作業や飛行場の滑走路の除雪作業をさせられた。零下四〇度は超えていたと思う。徹夜作業で、このときは、珍しくウォッカの水割りの配給があった。抑留中、このような待遇を受けることは二度となかった。作業隊の編成が始まり、機械工場、煉瓦工場、建築現場などに分散して作業にいくことになる。

私は地方での職業を生かし電気関係の仕事に就くことができた。機械工場で一般ソ連人と同じ仕事をし、対等にノルマを達成することができた。だが、この作業も長くはなく、次の組み替えで煉瓦工場へ行くことになる。作業は三交代制の粘土掘りで、作業隊中一番の重労働で、寒さと空腹でノルマの達成ができず、ほ

かの作業隊に迷惑をかけることもあった。毎日作業隊のノルマを掲示していたが、五〇パーセントを上下していたときには営倉へ入れると言って収容所長から叱られたこともあった。

この作業隊で心身共に疲れ果てていたころ、定期の健康診断があり、三級になり営内の軽作業に回され、炊事勤務となる。運よく炊事班には鞍山時代の深井班長が責任者をしていた。お陰で次の作業隊編成があるまでの長い間、炊事場勤務をさせられ、私にとっては大変有り難いことであった。

四月になり、今度は営内の軽作業班の中から十五名くらいだったと思う、呼び出しがあり、その日のうちに私物をまとめ一台のトラックに乗せられ、行き先も知らされず第十一分所を出発した。営内作業をしていた四、五人が手を振って見送ってくれた。一年半お世話になった収容所もこれが最後の別れとなった。その日のうちに到着した。

ここはサマルカンド・コルホーズであった。ここには板べいもなく、有刺鉄線もない。監視兵は二人いた

が、なんの拘束も受けることはなかった。これが本当の天国のような気がした。数日して、私たちと入れ替わり、先に来ていた十五名は、半信半疑ではあったが、日本へ帰ることになる。その中に、鞍山の部隊で一緒だった同県人の小村氏がいた。懐かしかった。鉄道駅まで見送って行く途中、もし内地へ帰ったら私が元気でいることを国の両親に伝えて欲しいとお願ひして別れた。復員後、両親は、小村氏が実家を訪ねてくれて、私が健在であることを直接聞き、安心したと話してくれた。その両親も既にこの世にはいない。

四月といっても地面は凍っていた。このコルホーズにはゲルマン系のソ連人が多かった。若者は日本と同じ戦争に駆り出され、老人と女性が多かった。当分は畑仕事もできず、植付用の種馬鈴薯の選別や、大根、キャベツの種子を作る作業をした。去年刈り取り乾燥した莢^{さや}を作業場の庭に広げて、これを裸馬に乗って馬に踏ませて、種を採り出す作業で、時には落馬したり、尻の皮はむける、大変な仕事だった。第二次大戦も終わり、ソ連でもこのころ復員軍人が一人、二人とコル

ホーズへも帰って来るようになった。

気候もよくなり植付、種まきの時期がやって来る。キャベツ、人参、トマト、玉葱、南瓜、ジャガ芋など、日本の農家で作るものと、少しもかわらず、土地が肥えているのか作物はよくできた。雨の少ない地方で、夏の作物には用水路から水を引くこともあった。時にはバッタの大群がキャベツ畑を襲うこともあり、人間の力ではどうすることもできず、広い畑をアツという間に丸裸にされたことがあった。シベリアは冬の来るのが早く、九月になると収穫で忙しくなり、馬に鎌を引かせて人参やジャガ芋を掘る。これを拾い集めて馬車で貯蔵庫へ運搬するのが主な仕事だった。

これから収穫の最盛期に入るという十月の初め、急に「東京ダモイ」が現実となって、一部残留者がいたが、ほとんどの者は帰国組に入っていたと思う。当日は持ち物といっても特別の物はなく、茶碗とコップ、スプーンを大事に持って鉄道駅に集結した。列車は相変わらず有蓋貨車の二段仕切りで、車内は「ダモイ」一色になり、故郷のことをいろいろ思い出しながら、

気持ちよく楽しい旅になった。時には、歌謡曲や浪曲、民謡と大変賑やかで、列車も順調に走り続け、一週間くらい日数がかかり、集結地ナホトカに到着した。

ここで最後の幕舎生活が一週間くらい続き、着いた日から民主化運動と言って、赤旗の歌や労働歌を毎日歌わされ、アクチブにより民主教育をうけた。これも帰国のためには、避けて通れない大きな関所であったと思う。また、ナホトカの高台にある建築現場に作業に行かされたが、そのときに港内に日の丸をつけた大きな船を見る。

この船が私たちを迎えに来た船だと言って、みんな手を振って喜びあった。十月七日、ようやく乗船の順番が回ってきて、解で本船まで運んでくれた。久しぶりに見る大きな日の丸の旗、船体には「恵山丸」と書いてあり、感動で胸がいっぱいになる。

広い船倉で休み、船内では船酔いをする者もなく、大きなトラブルもなかった。出港してからも日本海は波一つなく静かで、十月九日、待ち望んだ舞鶴港へ上陸。懐かしい祖国日本、こんな嬉しい気分になったこ

とはない。

検疫を終え、引揚寮の大きな風呂に入り、本当に生き返った気分になった。復員手続を終え、翌朝一番列車に乗り、故郷鳥根の実家に着いたのは、昭和二十二年十月十日、夜十一時ごろだった。

シベリア抑留から五十年になるが、昭和二十年八月十五日を境に暦と時計を必要としない、ただ食欲のみに全神経を働かせ時を過ごした今、いかに努力しても戦友の名前、また詳しい日常生活を思い出すことができない。今こうして、無事に健康で帰国でき、酷暑のなか、異国の地で尊い命をおとされた戦友の皆さんに、心から追悼の意を表するものであります。

私は帰国後、父母と共に農業にも従事していたが、昭和五十五年定年退職するまで、地元の市役所に勤務しておりました。そして退職後は家内とともに、再び農事をしながら健康にも恵まれ今日まで生活しています。